

〔研究ノート〕

大学1年生による意見文執筆の過程を たどる試み

——執筆中のキー操作を資料として——

田中啓行

- 〈目次〉
1. はじめに
 2. 先行研究
 3. 分析資料
 4. 分析
 5. まとめ

1. はじめに

大学におけるライティング教育に関して、3種の学会誌に掲載された実践報告をレビューした大場・大島（2016）によれば、様々なバリエーションのライティング教育の実践が行われており、一定の効果をあげてきたという。大学の初年次教育では、「専門的学術領域で学習を開始するまでの移行期間」（佐渡島ら（2016）p. 39）として、学術的文章が作成できるようになることが主たる目標になるが、各大学が置かれた状況によって、多様な目標設定が行われていると考えられる。また、大学生の日本語力については、極端に語彙サイズが小さい学生がいること（田島ほか（2016）、佐藤ほか（2017））やレポートにおいて同一の書き手が主述や呼応のねじれなどの問題を繰り返していること（大島（2010））などの指摘があり、基礎的な力を身に付けられるような指導も求められる。

そこで、本稿では大学生の基礎的な文章力について考察することを目的として、大学1年生が書いた意見文を1編取り上げ、分析する。その執筆中のキー操作から、執筆者である大学生が執筆中にどのような点を意識していたのかを明らかにすることを試みた結果を報告する。

2. 先行研究

2.1 文章執筆の「過程」「プロセス」

読解・作文やプログラミングのプロセスを測定して分析する研究について調査した山口・大場（2019）は、研究によって、「過程」を表す語が異なることを指摘している。文章執筆の「過程」や「プロセス」については、多くの先行研究が対象としてきたが、執筆時の意識（衣川（1995）、石橋（2005）など）や、作家の推敲時の言語操作（工藤・岡田・チェン（2015））など、分

析の対象とする「過程」や「プロセス」は異なっている。文章産出モデル (Hayes and Flower (1980)) に基づいた目標設定や構想 (衣川 (2000)), 思考やりソース活用の段階まで含めた「過程」を対象としている研究 (石毛 (2016)) もある。

2.2 執筆時の言語操作を対象とした研究

前節で述べた通り、文章執筆における「過程」「プロセス」には様々なものがあるが、本稿が対象とするのは、大学生がパソコンで文章を書く際に、どのような順序で文字列を入力したか、いつ、どこを修正したかなどの執筆時の言語操作である。執筆時の言語操作を分析することで、大学生がどのような点を意識して文章を書いているか、あるいは、何を意識できていないかを明らかにすることができ、大学生の文章の改善に資すると考えられる。本稿と同様に学生の執筆時の言語操作を対象とした先行研究に、細谷 (2003), 田中・石黒 (2018), 布施・石黒 (2018) がある。

細谷 (2003) は、大学院生が文章を執筆しているワープロの画面をビデオ録画して分析している。その結果を手書きによる執筆と比較し、ワープロを用いることによって手書きで行われる内的処理の一部が外在化される可能性を示唆している。

また、田中・石黒 (2018), 布施・石黒 (2018) は、本稿と同様に、キー操作を記録して分析したものである。中国人日本語学習者20名、韓国人日本語学習者20名、日本人大学生20名の作文の執筆過程を対象に、田中・石黒 (2018) は修正の位置と種類、布施・石黒 (2018) は修正の理由のタグを付けて集計し、統計的に日本語学習者の作文執筆の特徴を明らかにしている。本稿では、先行研究の成果をふまえたうえで、大学1年生の個別の文章の執筆過程を時系列に沿ってたどることを試みた。

3. 分析資料

本稿では、首都圏の私立大学の1年生 A が「写真と動画」というテーマで書いた作文のタイトルと冒頭の2段落を取り上げ、その執筆過程から読み取れることについて報告する。作文は、キー操作を記録できるアプリケーション⁽¹⁾を用いて1200字程度で書くように指示した。また、作文のテーマに関する指示は(1)のとおりである。⁽²⁾指示を受けて A が書いた作文の文字数は1118字、段落数は5であった。

(1) 「写真と動画」

思い出を残すとき、写真と動画のどちらがいいと思いますか。理由も書いてください。

本稿で意見文を取り上げるのは、根拠を示して自分の考えを書くことは学術的文章においても必要とされるからである。ただ、本研究は大学生の基礎的な文章力について考察することが目的であるため、専門的な知識がなくても書けるよう、学術的な内容ではなく、一般的な内容のテーマとした。

4. 分析

次の(2)は A が書いた作文のタイトルと冒頭の2段落である。

(2) 思い出の残し方

思い出を残す時、写真と動画どちらにもメリットはありますが、私は写真の方が良いと思っています。写真の方が手軽に撮れて見返しやすく、個人的には気に入った写真を飾っておくことができるということが好みます。

私の場合、部活の練習や試合で動画を撮って自分や部員のプレーを見返して良い部分や反省点を探すことに使う以外、ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は思い出を残す手段というよりも練習時や試合時のプレーの確認作業に使う手段という印象があるからではないかと思います。もちろん、子供がいる家庭で自分の子供の成長を記録しておきたい人などは動画の方が良いと感じることもあ
るでしょう。

Aは「思い出の残し方」というタイトルを付けているが、これは執筆途中で変更したものである。執筆開始直後、本文を書き始める前には、「思い出を残す時は写真と動画のどちらが良いか」というタイトルを付けていた。タイトルを付けるタイミングは、「最初に付ける」、「思い付いた時に付ける」、「文章を書き終わってから内容をふまえて付ける」というものが考えられる。Aの場合、執筆開始時は調査者からの指示とあまり変わらないタイトルを付けており、指示のとおりを書くという意識が窺える。その後、書いている途中で、内容をふまえたタイトルに修正したのであろう。

Aは最初のタイトルを書いたあと、すぐに本文を書き出している。次の(3)は、Aが冒頭の一文を書く過程を示したものである。用例中の下線は、前の行から変更されたり、追加されたりした部分、二重下線は次の行で削除された部分を示すものである。

- (3) ①思い出を残す時、私は写真の方が良いとかんがえてい
 ②思い出を残す時、私は写真の方が良いと
 ③思い出を残す時、私は写真の方が良いと思っています。
 ④思い出を残す時、写真にも動画にも私は写真の方が良いと思っ
 ています。
 ⑤思い出を残す時、写真と動画どちらにもメリットはあるが、私は
 写真の方が良いと思っています。

(第4段落まで執筆後)

- ⑥思い出を残す時、写真と動画どちらにもメリットはありますが、私は写真の方が良いと思っています。

Aは、まず「写真の方が良いと考えている」と書きかけて、文末を「思っています」に変えている。さらに、「写真の方が良い」という自分の意見の前に、「写真と動画どちらにもメリットはあるが」という譲歩の表現をあとから挿入している。自分の意見は決まっているが、それをはっきりと言いつけることに対しての逡巡が窺える。また、冒頭の文の執筆をいったん終えて後続の文章を書き、第4段落まで書いたあとに、節末の「メリットはあるが」を全体の文体に合わせて「メリットはありますが」と修正している。文体の統一を意識しながら執筆していると考えられる。

次の(4)は、第1段落の2文目の執筆過程である。

- (4) ①写真の方が手軽に撮ることができ、見返す
 ②写真の方が手軽に撮ることができ、見返しやすいという点が
 ③写真の方が手軽に撮ることができ、見返しやすいと感じていることが一番の理由です。

(第2段落を執筆後)

- ④写真の方が手軽で見返しやすいと感じていることが一番の理由です。
 ⑤写真の方が手軽で見返しやすく、気に入った写真をかざっておける
 ⑥写真の方が手軽で見返しやすく、気に入った写真をかざること
 ⑦写真の方が手軽で見返しやすく、気に入った写真を飾っておくことができる
 ⑧写真の方が手軽で見返しやすく、一番のメリットは気に入った写真を飾っておくことができる

- ⑨写真の方が手軽で見返しやすく、一番のメリットは気に入った写真を飾っておくことができるという点だと思います。
- ⑩写真の方が手軽に撮れて見返しやすく、一番のメリットは気に入った写真を飾っておくことができるという点だと思います。
- (第4段落を執筆後)
- ⑪写真の方が手軽に撮れて見返しやすく、個人的な一番のメリットは気に入った写真を飾っておくことができるという点だと思います。
- ⑫写真の方が手軽に撮れて見返しやすく、個人的には気に入った写真を飾っておくことができるということが好みです。

Aは、一度2文目を書き終えて、後続の段落を書いたあとに、複数回文末を直している。この文は、写真が良いと思う理由を述べるものであるが、「一番の理由です。」(③)、「一番のメリットは～という点だと思います。」(⑨)、「個人的には～ということが好みです。」(⑫)と、修正を重ねるにしたがって、個人的な考えであることを強く表す表現になっている。この傾向は、③で「見返しやすいという点が」を「見返しやすいと感じていることが」に変えていることにも表れている。

次の(5)は、(4)に続く、第2段落の執筆過程を示したものである。

- (5) ①動画を撮ることは、部活の練習や試合などで
- ②動画を撮ることは、部活の練習や試合で
- ③私の場合、部活の練習や試合で
- ④私の場合、部活の練習や試合で動画を撮って自分や部員のプレーを見返したり、
- ⑤私の場合、部活の練習や試合で動画を撮って自分や部員のプレーを見返したりすること以外ほとんど動画を撮らないので、思い出を残すという観点からすると

- ⑥私の場合、部活の練習や試合で動画を撮って自分や部員のプレーを見返したりすること以外ほとんど動画を撮らないので、思い出を残すという観点からみる
- ⑦私の場合、部活の練習や試合で動画を撮って自分や部員のプレーを見返したりすること以外ほとんど動画を撮らないので、思い出を残すという観点から考えると
- ⑧私の場合、部活の練習や試合で動画を撮って自分や部員のプレーを見返したりすること以外ほとんど動画を撮りません。思い出を残すという観点から考えると
- ⑨私の場合、部活の練習や試合で動画を撮って自分や部員のプレーを見返したりすること以外ほとんど動画を撮りません。
- ⑩私の場合、(中略)ほとんど動画を撮りません。動画は
- ⑪私の場合、(中略)ほとんど動画を撮りません。自分の中では動画は
- ⑫私の場合、(中略)ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は
- ⑬私の場合、(中略)ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は思い出を残す手段というよりも確認作業に使う手段という
- ⑭私の場合、(中略)ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は思い出を残す手段というよりもプレーの確認作業に使う手段という
- ⑮私の場合、(中略)ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は思い出を残す手段というよりも練習や試合のプレーの確認作業に使う手段という
- ⑯私の場合、(中略)ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は思い出を残す手段というよりも練習時や試合時のプレーの確認作業に使う手段という
- ⑰私の場合、(中略)ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画

は思い出を残す手段というよりも練習時や試合時のプレーの確認作業に使う手段といういめ

⑱私の場合、(中略)ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は思い出を残す手段というよりも練習時や試合時のプレーの確認作業に使う手段という印象があります。

⑲私の場合、(中略)ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は思い出を残す手段というよりも練習時や試合時のプレーの確認作業に使う手段という印象があるからだと思います。

(第3段落の1文目の執筆後)

⑳私の場合、(中略)ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は(中略)確認作業に使う手段という印象があるからだと思います。子供がいる家庭で成長を記録しておきたい人や、

㉑私の場合、(中略)ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は(中略)確認作業に使う手段という印象があるからだと思います。子供がいる家庭で自分の子供の成長を記録しておきたい人や、

㉒私の場合、(中略)ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は(中略)確認作業に使う手段という印象があるからだと思います。もちろん、子供がいる家庭で自分の子供の成長を記録しておきたい人などは動画の方が良いと感じることもあると思います。

㉓私の場合、部活の練習や試合で動画を撮って自分や部員のプレーを見返したりすること以外ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は(中略)確認作業に使う手段という印象があるからだと思います。もちろん、子供がいる家庭で自分の子供の成長を記録しておきたい人などは動画の方が良いと感じることもあるでしう。

(他の段落を執筆後)

㉔私の場合、部活の練習や試合で動画を撮って自分や部員のプレー

を見返して良い部分や反省点を探す時以外ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は（中略）確認作業に使う手段という印象があるからだと思います。もちろん、子供がいる家庭で自分の子供の成長を記録しておきたい人などは動画の方が良いと感じることもあるでしょう。

㉕私の場合、部活の練習や試合で動画を撮って自分や部員のプレーを見返して良い部分や反省点を探すことに使う以外ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は（中略）確認作業に使う手段という印象があるからだと思います。もちろん、子供がいる家庭で自分の子供の成長を記録しておきたい人などは動画の方が良いと感じることもあるでしょう。

㉖私の場合、（中略）ほとんど動画を撮りません。自分の中で動画は思い出を残す手段というよりも練習時や試合時のプレーの確認作業に使う手段という印象があるからではないかと思います。もちろん、子供がいる家庭で自分の子供の成長を記録しておきたい人などは動画の方が良いと感じることもあるでしょう。

まず①で「動画を撮ることは」と「動画を撮ること」を主題として書き始めるが、すぐに消し、「私の場合」と修正している。動画一般の話ではなく、自分の場合の話であることを明示した書き方に変えているのだと思われる。この意識は第1段落の執筆過程にも見られたものであり、⑩⑪で「自分の中で」という表現を2文目の冒頭に挿入していることから見て取れる。さらに、「印象があります。」という文末を「印象があるからだと思います。」(⑱)と修正している。Aは、一度書いた自分の意見を控えめに表す表現に修正する傾向が見られた。

また、(5)に続く第3段落の1文目は、「写真の場合は、何回も撮り直しができ、たくさん撮った中で気に入った一枚を選ぶことができるところが良いと思います。」という文であるが、この文を書いたあとに、「もちろん、子

供がいる家庭で自分の子供の成長を記録しておきたい人などは動画の方が良いと感じることもあるでしょう。」(20~23)という文を第2段落の末に付け加えている。第3段落で自分の意見として写真の良さについて書く前に、異なる意見への配慮が必要だと思い、付け加えたものであろう。このことにも、自分の意見はあくまでも自分の意見であり、異なる意見もあるということを意識しながら書いていることが見て取れる。

そのほかに、(5)の部分では、自分の動画の使い方の説明において、「見返したり、」の読点を削除し、複数の動作を並べることをやめて「見返したりすること以外」としたり(5)、「ほとんど動画を撮らないので、」を「ほとんど動画を撮りません。」として2文に分けたり(8)しており、文が長くならないように意識している様子が窺える。⑧については、「ほとんど動画を撮りません。」に続く「思い出を残すという観点から考えると」をすべて削除して、新たな文を書き始めており、文を分けるだけでなく、後続の文脈との対応も考えて修正したものと思われる。⁽³⁾ また、「確認作業」の前に「プレーの」を挿入し(14)、さらにその前に「練習や試合の」を挿入する(15)など、すでに書いた内容に関する情報を追加して、内容をより具体的にする修正も見られた。第3段落の内容とのつながりを考えて、第2段落に文を加えたり(20~23)、具体的な情報をあとから加えたり(14, 15)しているのは、布施・石黒(2018)が内容をより豊かにするために行う「精緻化修正」としているものにあたると思われる。布施・石黒(2018)では、「語句精緻化修正」、「節精緻化修正」、「先行文脈精緻化修正」と、あとから補う表現の長さによって分けて定義しており(pp. 23-26)、「語句精緻化修正」と「節精緻化修正」は韓国人学習者が有意に多く(pp. 34-35)、「先行文脈精緻化修正」は中国人学習者が有意に多かったとしている(p. 37)。また、日本語母語話者は「節精緻化修正」が有意に少なかったという(p. 35)。数は多くないかもしれないが、日本語母語話者の大学生の場合、どういう内容を書いているときにこのような修正を行うのか、作文の内容面からの検討も必要だと思われる。

5. まとめ

本稿で取り上げた大学生 A の意見文の執筆過程には下記の特徴が見られた。

- 1) 自分の意見を書いた文の文末を控えめな表現に修正したり，個人的な意見であることを明示したりする
- 2) 情報を加えて，内容をより具体的にする
- 3) 文の長さを意識して，文を分ける
- 4) 先まで書き進んだあとにも，すでに書いた箇所に戻って修正する

1) に関しては，今回は「作文」として書いたため，どこまで客観的な表現にするかについて，迷うこともあったのではないかと推察される。しかし，レポートなどの学術的文章における客観的な記述の仕方を指導する際にも，このような学生の意識を考慮する必要があるだろう。また，2) や 3) のように情報を加えたり，文を分けたりするような修正をしたときに，主述や呼応のねじれが生じないように意識させることも重要であると思われる。

本稿では，作文の一部分の分析に留まったが，執筆過程をたどることで，学生が執筆中に意識していることや学生の書き癖などを把握できる可能性を示せたと考える。布施・石黒（2018）は，「日本語母語話者は（中略）表現の長さを問わず表現に関する修正を多く行う傾向にあった。」と述べているが，どういった表現の修正を行うかについては，個人差があるものと思われる。特に，文章執筆を苦手とする学生に対しては，その学生の特徴を把握し，特徴に合わせて指導する必要があるだろう。今後は，執筆過程の分析を重ね，大学生の文章執筆の特徴を整理・分類することが課題である。また，本稿の調査では，作文執筆後に，執筆者へのインタビューも行っている。インタビューの内容を執筆過程と合わせて分析することで，執筆時の意識の分析をより精

緻にしていきたい。

【謝辞】 本稿は国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」（プロジェクトリーダー：石黒圭）の研究成果の一部である。また、本稿はJSPS 科研費 JP20K02974（研究代表者：田中啓行）および JP21H04417（研究代表者：石黒圭）の助成を受けたものである。学生の募集にご協力くださった先生方に感謝申し上げる。

【注】

- (1) 本稿の作文調査には、国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」において開発された Essay Logger TS を使用した。
- (2) 本稿で用例として挙げる指示文および作文の原文では句読点が用いられているが、本稿では『中央学院大学人間・自然論叢』の書式に合わせて、カンマとピリオドを用いる。
- (3) 布施・石黒（2018）は、このような修正を「後続文脈方向修正」と名付け、「書きかけた内容をそのまま書きつづけると、不適切な展開になることを予測して、執筆計画を変更し、新たな方向で書き出す修正」（p. 27）と定義している。

引用・参考文献

- 石毛順子（2016）「中国語を母語とする日本語学習者におけるパーソナルコンピューターでの作文過程——手書きによる作文過程との比較から——」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』8, pp. 19-27
- 大島弥生（2010）「〈実践報告〉大学生の文章に見る問題点の分類と文章表現能力育成の指標づくりの試み——ライティングのプロセスにおける協働学習の活用へ向けて」『京都大学高等教育研究』16, pp. 25-36
- 大場理恵子・大島弥生（2016）「大学教育における日本語ライティング指導の実践の動向——学術雑誌掲載実践報告のレビューを通じて——」『言語文化と日本語教育』51, pp. 1-10
- 衣川隆生（1995）「大学院留学生はどのように文章を書き上げているか——効率

- の書き手と非効率的書き手の文章産出過程の特徴」『JALT Journal』17 (2), pp. 197-212
- 衣川隆生 (2000) 「日本語を第二言語とする書き手の文章産出研究の枠組みの提案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』15, pp.13-24
- 工藤彰・岡田猛・チェン, ドミニク (2015) 「リアルタイムの創作情報に基づいた作家の執筆スタイルと推敲過程の分析」『認知科学』22 (4), pp. 573-590
- 佐藤尚子・田島ますみ・橋本美香・松下達彦・笹尾洋介 (2017) 「使用頻度に基づく日本語語彙サイズテストの開発——50,000語レベルまでの測定の試み——」『千葉大学国際教養学研究』1, pp. 15-26
- 佐渡島紗織・坂本麻裕子・宇都伸之・渡寛法・大野真澄・外村江里奈・中島宏治 (2016) 「因子分析による学術的文章作成力の構造解析」『リメディア教育研究』11 (2), pp. 39-48
- 田島ますみ・佐藤尚子・橋本美香・松下達彦・笹尾洋介 (2016) 「日本人大学生の日本語語彙量測定の試み」『中央学院大学人間・自然論叢』41, pp. 3-20
- 田中啓行・石黒圭 (2018) 「日本語学習者の作文執筆修正過程——中国人学習者と韓国学習者の修正の位置と種類の分析から——」『国立国語研究所論集』14, pp. 255-274
- 布施悠子・石黒圭 (2018) 「日本語学習者の作文執筆過程における自己修正理由——上級中国人学習者, 上級韓国人学習者, 日本語母語話者の作文の比較から——」『国立国語研究所論集』15, pp. 17-42
- 細谷由理子 (2003) 「ワードプロセッサによる文章産出過程の特徴——手書きとの差異に着目して——」『人文科教育研究』30, pp. 33-47
- 山口琢・大場みち子 (2019) 「読解・作文やプログラミングのプロセスを測定・分析する研究の動向——測定データと分析目的」『情報処理学会研究報告』情報処理学会研究報告 (Web) 2019 (CE-150)
- Hayes, John R. and Linda S. Flower (1980) *Identifying the organization of writing processes*. In : Lee W. Gregg and Erwin R. Steinberg (eds.) *Cognitive processes in writing*, pp. 3-30. Hillsdale, New Jersey : Lawrence Erlbaum Associates.